

後日本のナシヨナリズムと公共性」(新曜社、6300円)は、分厚く高価だが、「戦後」を真面目に生きたと自負する人は、耳を傾ける価値がある。自分の知識・記憶とぶつかりスパークし、思わぬ発見があるはずだ。

「戦後」も還暦近くになると、意味が混濁してくる。敗戦・占領下で貧困と混乱の中にあつた「第一の戦後」と、高度経済成長開始後の「第二の戦後」では、同じ言葉で正反対の意味を持ちうる。なるほど「戦後改革」では財閥解体や日本国憲法だが、「戦後政治」では自民党長期支配をイメージする。40歳の著者は、冷戦崩壊以降は「第三の戦後」に入ったという。

この手の交通整理自体は珍しくない。著者はさらに、「民主」「愛国」「市民」「近代」等々も同床異夢の世界だったのでと見立て、特攻青年の遺書から丸山真男ら知識人の言説に聴診器をあて、解説し、診断していく。

すると例えば、「鬼畜米英」と「アメリカ帝国主義打倒」の心情が、50年代国民的歴史学運動・共産党山村工作隊と68年全共闘運動の主張が、不思議に似た響きを帯びてくる。活字で残した言説を若気の至りという弁明は、時代背景も個人史もふまえた診断への答えにならない。願わくは異なる文脈から新たに解説した別のカルテも現れんことを。「戦後」の知のパノラマは、

ようやく見えてきたばかりだから。

日本の「戦後」より二回りほど早く生まれ老衰死したソ連邦となると、もはや弁明の余地なく解剖のメスが入る。下斗米伸夫「ソ連Ⅱ党が所有した国家」(講談社選書メチエ、1500円)が語り部に選んだのは、自己切開できずに逝ったレーニンやスターリンではなく、凡庸・忠実故に指導者のすべてを知る元外相モロトフだった。

最新の研究・資料を用いて語られるソ連74年の診断書は、出生の秘密より幼年期からの病歴に注目し、かつて日本で長く流布した「社会主義の祖国」像を打ち砕く。丸山「忠誠と反逆」風の裏話もある。政治家も財界人も学者も要注意。言説は結果責任である。死後の自分の評価を想像して慄然とし、長生きしなければと思うだろう。

歴史書の棚

ようやく見えてきた
戦後の知のパノラマ

